かがり火

発行所
〒542
大阪市中央区中寺1-1-54
大阪社会福祉指導センター内
大阪府社会福祉協議会
従事者部会
発行人　伊山喜二

思いやりのこころ大切に

従事者部会長　伊山　喜二

昭和六十三年四月に石井勲先生（現養護施設・信太学園施設長）の後を引き継ぎ、従事者部会第十六代部会長に就任することになりました。

浅学菲才の身でありながら、この重責を引き受けることになり、無我夢中で一年が経過いたしました。

親子二代にわたり部会長を任されることになり、父に負けないよう頑張りたいと思っております。

父が部会長を務めた昭和四十年代初めは部会の存続が重要な課題となり、「愛される従事者部会」をスローガンに活動を進めた時代であったと聞いております。

また三青荘の落成や民間共済会事業として引き継がれた新任職員激励会が始まり、現在の施設職員研修の礎を築くことになりました。

その後、処遇改善や研修およびレクリエーション活動など職員の福利厚生は著しい発展を遂げました。

年号も変わり、我々社会福祉に携わる者にとって、社会福祉士・介護福祉士の誕生により、施設従事者のより専門性が問われています。そして、果たすべき役割は今後一層重要となってまいりました。

従事者部会では業種別に毎月定例会を設け、従事者に関する諸問題の発見、解決のための協議と実行に努めております。

また全施設を対象にした研修会「集団指導者養成教室」の実施や、スキー教室の開催、コーラスクラブ活動、民間共済会事業への協力など従事者のための事業に取り組んでおります。

施設従事者として思いやりの心を大切にし、諸先輩が築き上げた従事者部会を後世に伝えるため、努力していく所存であります。

皆様方の今後のご協力よろしくお願い申し上げます。

（養護施設・南河学園　主任指導員）

先輩社会事業家の文集
足　跡
―あとにつづくもののために―
A5判　174頁　1,000円
大阪府社協従事者部会発行

従事者部会の思い出を語る

熱意と努力

大阪自彊館理事長
吉村　靱生

昭和三十二年、私が従事者部会長に就任したころの従事者の待遇は、終戦直後の状態よりは向上していたが、現在では想像も出来ないようなお粗末なものであった。

従事者部会では、このような状態を改善するために予算獲得運動に積極的に取り組んで、利用者の処遇向上や従事者の給与改善に努力した。

また、研修会も積極的に開催して資質の向上を図った。

このような運動や諸行事の計画段階から実行、後始末に至るまで、すべて若い従事者の奉仕的な活動によって支えられた。

そこには、いつも熱気の溢れる雰囲気があった。

この成果を全従事者に周知するために機関紙「かがりび」を発行し、八ミリ映画を作成して、東光学園の大谷寿男先生のお世話で徹夜でテープに音入れを行なったことも楽しい思い出である。

四十年近い従事者部会の活動は、時に消長があっても、一貫して従事者の地位の向上や能力を高めるために努力を続けてこられたことに深い感銘を受けるものである。

今後の日本は、人類が初めて経験する超高齢化社会に直面するので、従来のように施設の利用者の処遇だけで自己完結をすることは許されず、積極的に在宅福祉のために協力することが要請されている。

従事者部会が、皆さんの熱意と努力によって新しい時代の福祉に対応して事業を展開されることを期待している。

（第七代部会長
昭和三十二年―三十四年）

木津日

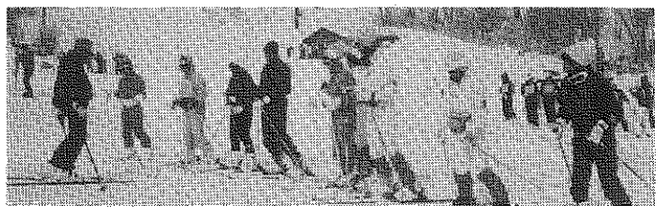
国の機関の土曜閉庁、金融機関の完全週休二日制移行という言葉を聞くと、我らの「福祉の心」はゆらぐ、「だが、我々の施設では…」という思いが頭をもたげて来るからである。施設の業種や職種によって異なると思われるが、現状では週休二日制はおろか、勤務時間短縮もおぼつかない施設があるのではなかろうか？私達従事者も人並みに時間が欲しい。社会情勢に目をやり、仕事や、身の廻りを振り返って見たいと思う。

そもそも社会事業の源は、民間人の止むに止まれぬ心にあった。我々の先輩は、貧しい人、困っている人を見ると、なけなしの金をはたいて助けた。しかし、今日ではその仕事の主流は地方公共団体の手に移り、税金でまかなわれ出した。大変喜ばしい事だと思う。

先輩に比べ随分恵まれた今の環境に甘んじる事なく、先輩の心と、業とを引き継ぎ、果し、そして次代に送っていかなければならない。それが私達の大切な一つの務めだと思う。(S)

従事者スキー教室

一月　赤倉コースより



例年にない暖冬で関西のゲレンデが雪不足に悩んでいる頃、長堀橋駐車場に集合したメンバーも、果して赤倉の状態はどのようなものかと若干の不安を胸にバスに乗り込んだ。

次の日リクライニングシートから眼ざめ、窓に目をやるとその不安は和らぎ始めた。雪景色は例年どおり我々を迎えてくれ、上越地方でも赤倉ぐらいがこの雪積を保っているということで一同「ホッ」と胸をなでおろした。

従事者部会では、毎年、産経新聞・大阪新聞厚生文化事業団及び大阪民間社会福祉事業従事者共済会の後援を頂き「従事者スキー教室」を実施している。「一月赤倉コース」「三月野沢コース」と初心者を歓迎し、多くの方に参加して頂けるようスキーシーズン中二回実施している。

今年は一月二十四日～二十八日、三月七日～十一日の期間で計画し、暖冬といわれていた中「一月赤倉コース」が実施された。

一日目、初心者及びスキーに自信のないメンバーは、スキー講習会を受講した。インストラクターに気に入られたのか？絶望的な出来の悪さがそうさせたのか終了時間を三十分延長した講習会だった。

その講習会が効をなしてか、次の日、全メンバーが中央スキー場ヨーデルロッジ前にて集合写真に入れるようになった。

昼間は果敢なスキー、アフタースキーは温泉、カラオケ、ディスコ等各々が楽しむ「スキー教室」であった。連日の過度の運動量と適度の宴で帰阪のバスの中では静かな寝息が聞こえていた。朝六時、予定どおり夜行バスは大阪駅に到着、解散時にまた来年も会うことをそれぞれの参加者が約束し合い、和気あいあいの中「一月赤倉コース」は終了した。

荒井恵一
（八尾母子ホーム）

活気あふれる

「コーラス部」

最近夕陽丘保育所から流れるコーラスの歌声が変ってきました。歌声が随分大きくなり男性の声も入っています。何かとても生き生きとしています。何かあったのでしょうか、一度訪ねてみました。

今までは玄関の片隅に揃えられていた履物が、今日は大きく場所をとっています。廊下を行くと奥のホールから美しいハーモニーが追ってきます。そこでは男女合わせて四十名近い先生方が、山本先生を中心に懸命に練習しています。うかがえばなんとあのシンフォニーホールに出席するのだそうです。

大社協が六月に主催する青少年健全育成チャリティークラシックコンサートに井上局長さんのお計らいにより出演が決定したとのことです。

従事者部会にコーラス部が誕生して十年を数えています。勤務時間や園の行事等の兼ね合いで練習に出かけにくいことや、おめでたいことながら結婚があいつぎ退部、新しい部員が増えない等悩みの多い中で指導者に恵まれ歌うことの喜びを感じ、色々な先生方と交流できる楽しみや教わることの多い機会となってきました。

今回の出演は創設者のおひとりである伊藤正子先生より「風前のともしびでも消さないでね。」の言葉を大切に細々ながら十年続けられたことへの大きな贈り物となりました。

今回の出演決定でたくさんの新しい先生方を迎えることが出来ました。

若き日のグリークラブの感動を今一度と応援してくださる園長先生、コーラス部に入って、園でもコーラス部が出来、仕事中もつい曲を口ずさみ子供に言われるんですと語られる先生、それぞれの思いを持って、大きなハーモニーの輪が広がっています。

すでに六月に向ってタクトは振りおろされています。当日は従事者部会らしい温かいコーラスが聞けると思います。皆さんも是非六月二十五日（日）にはザ・シンフォニーホールに出かけて、仲間の歌声を聞いてください。

朝川美知恵
（泉ヶ丘学院）

編集後記

かがり火を復刊して第三号の発行となった。

今回から毎年各部会から助成金を頂戴し、刊行する運びとなり、より充実した紙面づくりをめざして頑張らなければならないと、常任委員意気込んでいます。

年号も改まり、部会行事の集団指導者養成教室も十一年目を迎える。より内容を充実し、施設従事者のため頑張っていきたい。

集団指導者養成教室

施設従事者に浸透

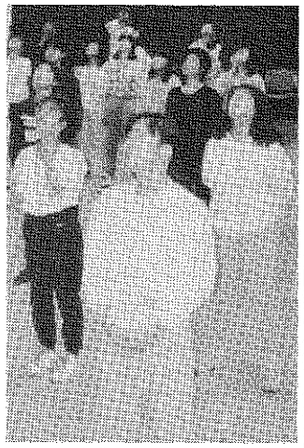
昭和五十四年にスタートした業種を横断した研修会「集団指導者養成教室」が昭和六十三年で十年目を迎えた。

ここに十年間の研修を振り返ってみることにする。

開催回数は年度によって異なるが、五回開催した年が二度、四回開催した年が七度、昭和六十三年度は年三回実施した。(表Ⅰ参照)

のべ参加者は、十年間で二千七百二十三人。平均すると毎回六十六名の参加となり、安定した人気を保っている。

参加者が最も多かったのは、昭和五十四年の第一回目で百十四名。



受講生による演習

集団指導のノウハウ学ぶ

この研修会は産経新聞・大阪新聞厚生文化事業団の助成により、従事者部会が実施するもので、大阪府下の社会福祉施設従事者の専門性を高めるために、特に集団指導の理論と技術を中心に幅広い範囲にわたる知識と技術を習得させ、社会福祉利用者の処遇向上に寄与することを目的として行われている。

企画・運営は各業種別に推薦された従事者部会常任委員が担当している。

毎年全回終了した段階で、反省と次年度への取り組みが検討されるが、内容の充実を図り、三桁の参加者を目標に計画されている。

しかし、最近では他機関が実施する研修会を多くなり、受ける側が期待する研修会作りを今後考えていきたい。

研修内容は集団指導の理論に関する講義と実技についての演習が中心である。

また広範囲の知識を学んでもらうため、各方面で活躍する人達にお願いし、社会教養講座や精神講座を設け、受講生から好評を得ている。

社会福祉の先輩による講義は、業種にかかわらず施設従事者として歩むべき指針となっている。

参加する研修

昭和五十五年度から毎回最終回に老人、児童、保育、成人施設の受講生の中からグループ指導についての研究発表の機会を設けた。

それぞれの立場から熱心な報告があり、受講生の意気込みがうかがえた。

これは五十九年まで五年つづけて行なわれた。

その後形を変え、全員がグループごとに分かれ、コミュニケーション作りについて学ぶ研修も試みられたが、講義形式の研修だけでなく、実習を織り込んだ研修に人気が高かった。

実技指導

集団指導者養成教室の特徴として、実際に体を動かしてもらう演習が多いことである。

ゲーム指導についての研修は十年間つづいている。

このほかリズム体操、フォークダンス、盆おどり、デンマーク体操など他では見られない実技指導を多く取り入れている。

内容的には、児童を対象とした施設処遇実践に役立つものが多く、保育所や養護施設からの参加が目立つ。

お年寄りや障害者を対象にした内容も含まれており、今後多くの種別の受講生が集まるよう呼びかけていきたい。

救急法と水泳指導については昭和五十八年から、毎年同時に実施している。

会場は西区にある岩崎レクリエーションセンターを利用している。

ここは大阪ガス従業員の福利厚生のためのスポーツ施設で、温水プールを開放してもらっている。

専門家による実技指導だけでなく、すばらしい施設の提供とサービスにより受講生の参加は多い。

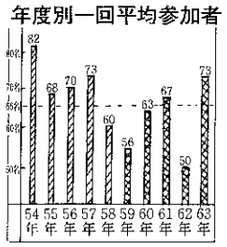
また、この救急法で学んだことが現実に施設内で起きた事故に生かされたという報告があった。(かがり火第2号で紹介)

企画した従事者部会にとって、うれしい知らせであった。

(つづく)

(表Ⅰ) 昭和63年度集団指導者養成教室実施表

回	期日	会場	時間	科目および講師	参加者
1	7月7日(木)	岩崎レクリエーションセンター	10時～4時	①開講式 ②「救急法と水泳指導」 財団法人　健康管理・開発センター 八尾アスレチックセンター　池谷茂隆氏	72名
2	10月28日(金)	大阪社会福祉指導センター	10時～12時	「グループワークの応用」 神戸女学院大学 教　授　大利一雄氏	77名
			1時～4時	「ゲーム指導の実際」 大阪府レクリエーション協会 公認指導員　白神啓子氏	
3	11月11日(金)	大阪社会福祉指導センター	10時～12時	「社会教養講座」 仏教大学 助教授兼学生部長　小倉美津子氏	71名
			1時～4時	①「デンマーク体操の指導」 神戸女子大学講師　重福京子氏 ②閉講式	



従事者の声

前号に掲載した特集「従事者の声」を引きつづき紹介する。

今回は成人施設と児童施設の従事者にご登場いただいた。

寮母が階段を上る時

専門学校を卒業してすぐ寮母になり、早や五年が過ぎようとしています。長いようでもあり、あっという間のことだったような気もします。

いろんなことがありました。寮の階段を上る時、足取りが重かったり、反対に何となく軽い感じの日もあるのです。

寮生とささいなことから意見が衝突したり、良かれと思ってしたことが、受け入れてもらえなかった時はクツに鉛がついているようです。「百段もあるのじゃないかしら。」

もちろん軽い日もあります。無口な人が明るく声をかけてくれたり、失禁ばかりする人が、自分で排尿できた時、こんな時は二段跳びです。

この五年間、振り返ると重い日の方が多いようです。それだけ反省が多いということなのです。階段の数を少なく感じ、少しでも多くの感動が残せるよう、充実した日々を持ちたいものです。

原　直美
(身障療護施設・今宮寮)

行事を楽しむ人たち

「信じようとする意志」

人は、信ずべき対象があるから信じるのか、それとも、信じようという意志があるから信じるのか。有名な一節である。

「ネイティブ・サン」という映画。黒人青年がふとしたことで、白人女性を殺してしまう。殺害と直接関係があった訳ではないが、彼の心の中には、世間(白人)の黒人への偏見に対する卑屈な潜在的意識があった。

逮捕された彼は、孤独の檻の中で省みる。私は今まで白人が黒人全てを蔑視していると思っていたが、同時に黒人が蔑視されているという意識をもっていて、白人を「白人」という目で見ていた。その意識をすてない限り両者の隔たりは決して縮まらない、と。

例えが悪かったかも知れない。初歩的なことだろうが、要は、「入所者」と「職員」という意識をこえた人間同士のつながりが大事だと思う。入所者の人格を認めることが、自分の人格が認められることになるのではないか。真の信頼とはそこから生じてくるものだと思う。

冒頭の問いは、私は後者だと思う。

松田昌訓
(救護施設・布施救護院)

従事者部会のひとりとして

日頃、私達は社会福祉従事者として、家庭養護に欠ける子供達をお世話させて頂いております。

集団生活に於いて単調な毎日になりがちな子供達ですが、色々と工夫し変化をもたせる努力をしています。

園内外の行事や招待行事等では日常では得ることのできない経験ができ、子供も職員も一生懸命取り組んでいます。

そんな中で、従事者体育祭等に参加させて頂いた時は、いつもの行事とは違いスタッフではなく参加者の立場ですので自分達が十分に楽しませて頂き嬉しく思っています。昨年の従事者体育祭では選手宣誓という大役をさせて頂き又、多くの従事者の方々と接し皆さんの福祉に対する熱意に感激し、より一層この社会福祉事業に打ち込んで頑張らねばと決意しました。

白鳥淳子
(養護施設・子供の家)

心にゆとりを

地価が急騰しているというのに、最近建つ家は、ゆとりの空間として、吹き抜け等を多用していると聞きます。また、〝くう・ねる・あそぶ〟というコピーで、生活のゆとりを強調した高級車が売れ、〝ゆとりにとろん〟というテレビも売られています。

日本は物質的に豊かになったが、人々の心は豊かになっていないと、よく言われています。諸先輩方の努力で、施設においても生活水準が向上した今、我々が豊かな心を持って心豊かな子供を育ててゆかなければなりません。豊かな心を持つためには、心に〝ゆとり〟を持たなければならないでしょう。我々は、決して仕事に追われてはならないと、最近思うようになりました。我々が仕事を追い、それを客観的に見つめることができるゆとりがなければならないと思います。

竹崎博幸
(虚弱児施設・健康の里)